
カッンと一蹴り

† アラクネ †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カッソと一蹴り

【Nコード】

N3614C

【作者名】

十アラクネ十

【あらすじ】

酔って歩く、心地良い深夜の近所。足の先に何かぶつけたが、まあいいやと気にしない。だって酔っ払って、そんなもんだろう？

ふらりふらりと歩いてた帰り道、足にカツンと硬い感触。
んん、と臆げな視線を巡らせはしたもの、僕は特別気にもせず
歩を進める。

いいのだ。無礼講、無礼講。

何せ今の僕は、天下無敵の酔っ払い。

上司を挙げて讃えて午前二時、体を張った凜々しき企業戦士なり。

僕は見慣れた街並みの静寂の中を、ふらつく足取りで闊歩する。
街の賑わいから少し離れた片田舎。深夜ともなれば、人や車の往
来はほとんど無い。

我が物顔で縦横無尽に道を横切っていた僕だったが、ふとある角
を曲がった自動販売機の前に、若い女の子の姿を発見した。

明るい栗色のボリウムある巻き髪。胸を強調するようなＴシャ
ツに、だらけた灰色のスウェットパンツ。

成る程。いかにも深夜の徘徊に相応しい姿。

「お姉ちゃん、ジュースクらい奢ってやるよお」

ヘラヘラと笑って、僕はすれ違い様に彼女の手元に千円札をヒラ
リと舞わせる。酔いの力とは恐ろしいものだ。

彼女が地面に落ちた札を拾って振り返るより前に、僕は次の角を
曲がっている。

ふらりふらりと歩く。

真夏の夜風が、じつとりと温い。

少し先の街灯の辺りに、気怠げに歩く人影を見付けた。

またもや若い女の子だ。ありがちな栗色の巻き髪に、ありがちな
若者らしいワンピース。

短い裾から覗く白い足に、さりげなく視線を送りながら通り過ぎ
る。テクテク、テクテクと、自分の足音が耳に軽い。

コンビニの駐車場の隅に、膝を抱えて座る女の子を見つけた。またもや栗色の巻き髪。服装はよく分らない。

心地良い夜風のせい、酔いが少しずつ醒まされてきたようだ。ほんの少しだけ冴えた頭で、近頃の未成年は本当に個性が無い、などと考えた。

もうすぐ我が家だと思った頃、いつも行く馴染みの酒屋の前に、じつと佇む女の子を見た。

やはり栗色のゆったりした巻き髪、服装も若者特有の気怠げなもの。

「夜中はあ、酒の自販機は止められてるよ」

軽口を叩き、けれど背中に入った悪寒は何だろう？

僕は少し早足になる。

足早に進んだ道の先に、またもや若い女の子の姿。

鮮やかなキャミソール、痩せて尖った肩を覆うのは、栗色のたっぷりとした巻き髪。

「……」

無言で通り過ぎる僕の背中を、密やかに振り返る気配がする。

「……っ」

ゾワリ。

冷たいものが走り、全身が一斉に泡立った。

（何だよ……）

更に歩くスピードを早めながら、僕はゴシゴシと腕を摩る。

（夜道に怯えるなんて、それこそ小娘じゃあるまいし）

嘲笑気味に、軽く自分を叱咤してはみるものの。

ふいに頭に浮かんだのは、不吉で良からぬ嫌な記憶。

（そういえば）

三カ月ほど前に、近所で起こった死亡事故。

（確か、さっき通って来た場所が……）

免許取り立ての若い女の子が、深夜にアクセルとブレーキを踏み間違えて、電柱に猛スピードで激突。

運転手の少女は即死。その遺体はあまりにも惨たらしく、駆け付けた母親はそれを見るなり、

……気が触れて、おかしくなってしまった程だったとか……。

「……」

ぞくり。

悪寒と共に、残っていた酔いが瞬時に遠退く。

（さっき、事故現場の横を通ってきたよな）

そうだ。確かにそうだが、駅から自宅までのルートなのだから仕方ない。ずっと前からいつも歩いている道だし、何よりあの事故の後だって何十回も通っている。事故のことなど気にしたこともない。

……なのに、今に限ってこんなにもあの事故が気になっているのは何故か？

カッン。

小気味よい音。

靴の先に当たる固い感触。

僕の革靴が弾いて飛ばした。

（何を？）

アスファルトの地面に叩かれ弾んだあれ。

（……写真立て）

そう、写真立てだ。

先程僕が蹴り飛ばしたのは写真立て。真っ白な花が活けられたいくつもの花瓶の前に、下に白いハンカチをひいて丁寧に置かれていた……。

（事故で死んだ女の子の写真が入った……）

ソワアッ。

そこまで考えて、僕は慌てて頭を振った。
下らない。

いい年して、一体何を考えているのやら。

わざとらしく馬鹿に明るい鼻歌など漏らしてみる。少し先に、ようやくアパートの明かりが見えてきた。

（……やれやれ）

見慣れたその姿にホツとする。一つ安堵の溜め息を吐くと、僕は何とはなしに來た道を振り返り。

次の瞬間、深夜の静寂に霞もない大絶叫が響き渡っていた。

振り向いた視線の先には、無惨に潰れてひしゃげた軽自動車が横たわっていた。

生々しくオイルを垂らし、燻った黒い煙を上げる、かつては自動車だった鉄の塊。

歪んで砕けた窓の隙間から、今まさにぬるりと突き出したのは、血まみれの人の手ではないのか。

ビクビクと痙攣しながら折れたワイパーを掴み、ぎこちなく軋んだ音を立てて少しずつ這い出してくる。

「……あ、あ、あ」

口を絶叫の形のまま開きつ放しに、僕はその場に固まって喘いだ。（まさか、だってあんな、あんな事くらいで！）

街灯の薄い光に影を引き、横転した車の窓からゆっくりと、血に塗れた少女の頭が突き出してくる。

「ひっ……！？ う、うあああああ！！」

その無惨な顔を見てしまうより早く、僕は恐怖に弾かれて猛然と走り出した。

（わざとじゃない、わざとじゃない！ 酔ってたから、だから）

必死で言い訳を念じつつ、死に物狂いでアパートを目指す。心臓が恐ろしいくらいに激動し、涙と汗がドツと噴き出して流れる。

（悪気なんか無かったのに！ あんな、あんなことくらいで、こんな）

僕は歯をガチガチと鳴らしながら、アパートの階段をもつれる足で駆け登った。

……、
カンカンカンカン！！

一拍子置いて、後ろから階段を駆け上がってくる足音。

「ヒイツ！？」

短い悲鳴を上げ、脱兎の如く自室の扉に駆け寄る。

鍵、鍵、鍵、鍵！

部屋の前で落ち着きなく足踏みしながら、必死でポケットをまさぐる。

指先が鍵に触れたと思った瞬間、開くはずのない扉が突然開いた。

「！？」

驚きに目を見張ったその次には、いきなり二本の腕に肩を掴まれ、否応なく部屋の中に引きずり込まれる。

背後で叩き付けるように扉が閉まる音、鍵の掛けられるガチャンという音に絶望した。

「き……、きやあああああつ！？」

閉じ込められた、と慄いて見開かれた僕の目は、闇に浮かぶ彼女の惨状を至近距離から見てしまう。

蒼白な顔の中にある、白く濁った目を。半開きになった土気色の唇から覗く、灰色の舌を。暗く虚しい死者そのものと成り果てた、かつては美しかったであろう少女の砕けた赤い顔を。

「きやああ、きやあああつ！！」

再び女のような情けない悲鳴を上げ、僕は無茶苦茶に暴れて冷たい腕から逃れた。

玄関扉に強く背中をぶつけたようだが、痛みは全く感じない。闇に浮かぶ少女を凝視したままガクガクと震え、手探りで慌ただしくドアノブを求める。

（許して、許して、許して、許して……）

汗で滑る掌が金属製のドアノブを掴んだ途端、突然それがガチャ

ガチャと回り出した。

「……っ!!」

心臓が激しく跳ね、カラカラに渴いた喉からは悲鳴さえ出ない。
もはや失神寸前の僕に追い打ちをかけるように、鉄の扉がドン！
ドン！ と鈍く揺れる。

「……っ、……っ!!」

激しく何かが扉に体当たりする音、金属が激しく軋む音に混じって聞こえた、醜く歪んだ獣のような怒号。

『開ける!!!』

(……!?)

全身を冷たい汗でびっしょりと濡らしながらも、僕は辛うじて硬直した体を捻ることに成功した。

ガチガチと歯を鳴らして恐怖に涙を滲ませながら、恐る恐るドアスコープを覗き込む。

魚眼レンズの歪んだ視界の向こう。

それを見た瞬間、僕はついに腰を抜かして玄関に崩れ落ちた。

『開ける!! 開ける開ける開けるおお!!!』

醜く歪んだ怒鳴り声。

『お前お前お前よくもあたしのあたあたしの娘の写真をををを!!』

扉の向こうでは、髪を振り乱し目を真っ赤に充血させた中年女が、すごい勢いで包丁を振り回していた。

(娘の遺体を見て、気が触れた、母親……)

脱力した僕の股間がじわりと温かくなり、玄関の床に水溜まりが広がる。

薄ぼんやりと浮かび上がっていた少女は、そんな僕に視線を落とすでもなく。

ただ悲しげに目を伏せ、溜め息のような音を残して、ひっそりと闇に溶けて消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3614c/>

カツンと一蹴り

2010年10月8日15時31分発行